



JOURNAL

Contents

- 事業紹介…女性の政策参画セミナー（前編）
- 事業紹介…女性に対する暴力に関する調査研究から視えてきたもの・SOHOで自分の仕事をつくらう
- 特集…くるめフォーラム2007 市民企画特集
- 誌上講座レポート…自分らしく生きる～男と女のいい関係～
- 相談室だより…「北九州監禁殺害事件について」
- 男女平等政策室からのお知らせ…市補助団体の男女平等参画の状況
- 登録団体紹介…北京JAC久留米
- 図書情報ステーションコーナー…フォーラムで上映された映画です

<http://www.elpia.kurume.fukuoka.jp>



くるめ発

女性の政策参画セミナー（前編）

政策や意思決定の場への女性の参画を応援するための人材養成講座として、毎月1回（6回シリーズ）で「女性の政策参画セミナー～ここから始まるさんかくデビュー～」を実施しています。シリーズ前編の一部をご紹介します。

男女共同参画週間記念事業 「地域発・女性の政策参画をめざして」6/25 福岡県男女共同参画センター「あすばる」館長 中嶋 玲子

女性の政策参画セミナーは、中嶋さんの『男女共同参画とは私達の日常生活の中での慣習や思い込みのおかしさに気づくことから始まると思います。私自身がこれまで歩いてきた道のりが男女共同参画そのものだと思います。』から始まりました。

4世代の大家族の中で、家族みんなが性別役割分業の意識という思い込みの中で生活してきました。女性は、労働はしていてもいらない自立も認められません。本当にこのままでいいのか。変えなければ変わらない。頼りにされる労働力というだけでなく、経営のパートナーにならなくてはいけない。そのためには技術を磨き知識も得なければいけないと思って勉強会に行くようになり、地域の女性たちと一緒に声をあげ活動を始めました。住みよい地域を創っていくには女性も政策決定の場に出るべきだと思います。

＜男女共同参画を進めるために＞

「生きやすい」「住みやすい」「暮らしやすい」そのような社会を作るためには様々な人たちの意見を反映させる政治を行う必要があります。その中に男女共同参画という視点が必要なのです。そのためにはまず法律の整備が必要です。そのことによって、少しずつ環境が変わり制度やシステムも改善されます。そして、その一方で意識の改革が必要です。「そんなこと言ったら怒られるから…」「怒られるから…」等、物事は男性が決まらなければならないと思ってしまう。男女共同参画を進めるためにはエンパワメントと慣習の見直しが必要です。また、知らなければ何も言えません。力をつけるためには学習し、環境づくりとアクションを起こしていかなければならないのです。人任せではなく政策方針決定の場へ参画することが大事なのです。

＜政策立案及び決定への共同参画＞

政策立案及び決定への共同参画は2つあります。1つ目は政治への女性の参画。女性議員を選出していくことです。まだまだ女性の政治への参画はできにくい。私が町議会議員に立候補した時は、選挙のやり方を変えようと手弁当で頑張ってもらいました。女性議員が出ることは今までの選挙のやり方を変えていくためにもとても良いことなのです。多くの女性議員は家族に反対され、それでもやろうと思って立候補したリスクが大きいから、より熱心に活動します。

「アメリカ文化の中で女の子を育てて」 7/27 詩人 伊藤 比呂美



交流会は、講話を囲み和やかな雰囲気の中で盛り上がりました。

2つ目は公職への女性の参画。身近な課題を解決していくためには、審議会等への女性の参画が必要です。現実はまだ女性委員が少なく、男女共同参画社会の実現のためには、政治への参画とともに政策方針決定への女性の参画拡大が重要なテーマです。

そのためには、女性委員として市町村の課題や総合計画又は条例や要綱、行政の仕組み等知識を習得し、資質を向上させることが重要です。そして自分が参画する意義をしっかりと自覚しエンパワメントし、そして発揮する。会議等では「黙って帰らない」「大きな声に勝たない」という心がけも重要なことです。

アメリカに住んで仕事・育児をする中でみてきた、アメリカの子育て事情・男女関係・絵本の中のジェンダーバイアス等についてわかりやすく話していただきました。後半は、質問に答える「ライブ 万事OK!」。ユーモアを交えた説得力のある話しに、参加者は大満足でした。

男女共同参画週間6/23～29記念事業にふさわしい力強いお話しに、皆さんしっかり聞き入っていました。

「暮らしから見る制度と政策」8/24 投稿誌「わいふ」前編集長 田中 喜美子

女性の投稿誌「わいふ」の編集長として平成18年6月までの30年間、女性のありとあらゆる声を拾い上げてきた中で、女性の今の現実には政治的に作られているということがみえてきました。

「男は仕事・女は家庭」という刷り込み。これは戦後、女性に割り当てられてきたライフパターンです。妻が夫の給料を管理し、子育てにのみめりこみ、女性はそれに満足していました。その一方で男性は、働きづめでその延長線上の過労死、過労自殺、うつ病。こういう非人間的な働きを何十年もやってきたから日本の経済が成長してきたといえます。

しかしながら、家庭の問題は政治の問題なのです。何をどう変えていくかこれから勝負です。そのためには、女性がおかれた状況をよく知るとともに、戦後60年間の政治が何をしてきたかをもっと知っていただきたいと思います。そして、政治をもっと身近にたくり寄せて、生活者の視点からものを言っていかなければなりません。

女性は能力があります。やる気を出したらすごい。そして一番いいことは、男性より互いに連帯しあう。日本をよくしていくために、女性同士が手を取り合い女性センターを活用する等し知識を高めて連帯して行動すべきなのです。





自分らしく生きる

～男と女のいい関係～

講師：残間 里江子さん(プロデューサー)

1950年仙台市生まれ。1980年に企画制作会社「キャンディッド・コミュニケーションズ」を設立。2005年シニアに向けた新しいライフスタイルを提案する会社「クリエイティブ・シニア」を設立し代表取締役社長に就任。近著「モグラ女の逆襲」「それでいいのか蕎麦打ち男」。2007年ユニバーサル技能五輪国際大会総合プロデューサー。財務省「財政制度等審議会」委員、国土交通省「地域づくり表彰審議会」等行政機関の委員も多く務める。

(このレポートは10月7日に行われた講演の一部を抜粋し、センターで要約したものです。)

オトナたちの時代

私は50代以上をシニアとっていますが、英語本来の意味の「上級者」「達人」みたいなオトナたちが増えて、もう少し生きやすく、若々しくいつまでも元気に自分の人生を堪能できるような世の中にしたいという思いが基本にあります。私はプロデューサーですけど、仕事の表現方法はその時々、書籍だったり、イベントだったり、講演活動だったりするわけです。プロデューサーの仕事をサポートするため、2つの会社を作りました。そのうちのひとつが、新しいシニアのためのライフステージを創る会社です。私自身は残された人生を使って日本のオトナたちがいきいきと生きられるよう、雇用の問題、健康の問題などに取り組んでいきたいと思っています。また男女共同参画は各年代層それぞれの課題はありますが、今日は特に団塊の世代前後のシニアの男女共同参画についてお話ししていきたいと思っています。

男女共同参画って…

男女共同参画というと、硬いイメージがあるようでなかなか若い皆さんは関心をもってくれません。そこには見えない壁みたいなものがあって何かしら参画しにくいんだと思う。また各種審議会の女性登用率は上がっていますが、よく見ると、一人が何役もやっていて実人数はそんなに増えていないということもあります。国際的に見ても、性による格差は、日本は115か国中79番目という状況が、昨年の世界経済フォーラムで出ていて、まだまだ日本の女性は権利を主張していないという結果です。

本来、この世に生を受けながら、ごく普通にそれぞれの人々が自分の持っている資質を活かしてそれぞれの生き方をしていけばよくて、それを国が「ああしなさい、こうしなさい。」というのはあかしいわけです。でもこれからの男女共同参画は、初めからもう一度、戦路を立てて冷静に、もっとこなれた感じでしかも楽しく、というようにやわらかいところからやっていかないと、若い人たちが関心を持ってくれないし先に進まないと思います。

モグラ女と蕎麦打ち男

団塊の世代の女性は就職先も少なかったし、就職したとしても25歳ぐらいで結婚し退職するというのが当然という時代でした。世の中に出たくても出られなかった女性がたくさんいます。それは、地中に埋もれていたモグラのようなもので、団塊女性たちは出ようとするとモグラたたきにあうなど、なかなかうまくいきませんでした。それを逆して私は「モグラ女」と呼んだのですが、50代も半ば過ぎた今こそ世の中に出るべき時が来た…ということで「モグラ女の逆襲」という本を書いたわけです。その前に「それでいいのか蕎麦打ち男」を書いていますが男たちも、もちろん何もやらないよりは蕎麦打ちやったほうがいいのですが、ただ打っていても始まらないと思うのです。「蕎麦打ち人口50数万人・全国の蕎麦打ち道場300箇所」といわれ、そこで蕎麦打ちしている男たちの多くは、そこから先に行っていない。せっかく「蕎麦」まで行ったのなら、何か今までと違う人の流れをつくるとか、今までと一味違うことをしてほしいという思いが強かったです。

オトナたちへ

これからの中高年の男女には、今「改めての自立」が突きつけられています。もう一度、自分が一人で立つためには、まずビジョンを持つことだと思います。1年後、3年後、5年後自分はどうしたいとか、こんな自分でいたいという理想の姿をイメージして、なにかしら基準を作ることが大事です。それから物事に優先順位をつけること。私たちの年代はそろそろ時間もエネルギーも有限になってきています。優先順位をつけたら、できることから始めてみる。その時、できれば人から褒められたことのあるような、自分にとって得意なことをやる方がより良いと思います。それにも増して大事なことは、決してあきらめないこと。これからのオトナは、あきらめないどころか、一歩先を行って自分の意志を表に出すようにしたいですね。是非「私たちは自立したオトナの女、オトナの男」といえるよう、一緒にがんばっていきましょう！

相談業務担当者研修会 (H19.5.17)

「女性に対する暴力に関する調査研究から視えてきたもの」～女性に対する暴力の現状と課題～

講師/内閣府男女共同参画局推進課 暴力対策専門チーム・チームリーダー 土井真知さん

●内閣府が行った3つの調査研究をもとに、そこから視えてきた現状と課題についてお話していただきました。

<表面化しにくいDV>

男女間における暴力では、「異性から無理やり性交された経験」について詳しく触られました。

- ①被害体験者の43%は19歳までに被害を受けており、加害者と面識がある場合が79.6%であること
- ②加害者は主に親、きょうだい、親戚、学校の関係者であること
- ③被害に遭った場所は学校と家の中が多いこと
- ④面識があるがゆえに相談しにくく、3人に2人は誰にも相談していないこと、したがって表面化しにくい実態があることが調査からわかりました。

DVは構造的な問題で、ジェンダーに根ざす問題であり、女性は所有物、従属物としてとらえられている実情が語られました。

<厳しい自立への道のり>

「自立支援等に関する調査」では、避難後は就職先がなく、ほとんどが非正規職であること、住宅確保が難しいこと、保育所不足など、自立した生活には程遠い厳しい現実を突きつけられ、具体的な社会資源の開拓の必要性を痛感しました。

<加害者更生プログラム>

最後の「加害者更生プログラム」については、国が任意参加による加害者更生プログラムの実施に関与することは、本当に更生してほしい加害者の参加は得にくく、無用な権威付けになりかねないことなどから、「条件が整っていない」として、必要に応じた調査研究の実施の提言にとどまった経過が述べられました。

改めて「変わりたくない」加害者の更生の難しさを実感しました。

今回使用した調査研究報告書

- ①「男女間における暴力に関する調査」(平成17年実施)
- ②「配偶者からの暴力の被害者の自立支援等に関する調査」(平成18年実施)
- ③「配偶者からの暴力の加害者更生に関する検討委員会報告書」(平成18年6月発表)



まずは、過去に経験した自分の仕事を「棚卸し」してみる。仕事体験を丁寧に書き出して、好きだった仕事や得意だったことを探す。それをグループメンバーに話しながら、自分で気付くこともあり、また、ほめられたり励まされたりして、聞きしていくこともあります。

そのようにしてつかんビ「私のスキル」をビジネスとして自分のものにしていくためには、さらに時代のキーワード(生活者、少子高齢社会、地域、ITの進化)を認識した仕事づくりが必要です。

SOHO事業者としての先輩でもある深川さんからは「組み合わせてビジネスを」「勉強会やセミナーで新たな人との繋がりをつくること」など、自分の仕事を進めていく上での具体的なアドバイスが出されました。

最後に自分のSOHOプランを発表。「難しかったけど自分の未来が見えたような気がする。」という明るい顔の人たちが印象的でした。

起業支援セミナー2007

SOHOで自分の仕事をつくろう(全4回)

講師/助言者 深川智恵美(SOHO筑後川代表)

<第1回 私のSOHO,私の起業>

(7/20 体験者から聞く)

安藤裕子さん、西由紀子さん、松本倫子さんは、それぞれ、パソコン・コンサルティング、ライティング、「テープ起こし」といった自分の技術(スキル)を使って自宅での仕事を始めたばかり。仕事につながるスキルの訓練をどのようにしてきたか、仕事のスタートにつながるきっかけはどんなことだったか、など率直に体験を話してもらいました。3人とも受注する仕事量がまだ不安定ということですが、仕事に向かう生き生きとした姿は、参加者(約40名)の気持ちを奮い立たせていました。

<第2～4回 SOHOをスタートするために>

(7/27, 8/3, 8/10グループワーク)

SOHOとして仕事をするために、基本技術やビジネスの仕方をどう決めたらいいのでしょうか。これは、起業にあたって、誰もがひそかに悩み、決断を迫られる難しい問題といえます。ここを、グループワークをとおして考え、組み立てていくのが今回のセミナーの1番のポイント。自分に何ができるか、何がしたいのかを、必死で考えていくことになりました。

